

読みの力を高める指導の工夫

～好きな作品から感じ取ったことをブックリストにまとめよう～

1 主題設定の理由

現代は情報社会と呼ばれ、多様な生活様式や考え方が増えた。そのような社会の中に適応していくためには、子どもたちが自分の考えをもち、判断し、表現する力が求められている。そこで、基盤となる読書教育において、自分の思いを表現し、伝え合うことで読みの力を高めるための指導方法を考えた。

本学級の子どもは、大変元気で明るく、楽しい学習活動には積極的に取り組むことができる。また、与えられた課題に取り組む姿勢も誠実である。だが、読書が好きだと答える子どもが多い一方で、読み取ったことに対して、自分の考えをもったり表現したりすることは苦手な子どもが多い傾向にある。そこで、このような実態をふまえて、年間の国語科指導計画を立てた。「川とノリオ」や「きつねの窓」では、小集団読書であるリテラチャーサークルの手法を一部用いて、「読み」の観点を広げた。

本研究は、第6学年（33名）国語科学習の最後に位置付けた。自分がこれまで読んできた本の中から気に入ったものを選び、再読することで読み味わいながら作者の思いを捉える。そのうえで「自分はこうしたい」という考えを表現するため、①自分なりの表現を付け加える ②一部分の表現を換える ③登場人物の視点を変える などの翻作活動（本文 注1）に取り組んだ。子どもたちは、選んだ作品に対する自分の思いを表現するために自力で何度も読む中で、作品にある背景や人物の考えに共感したり、自分との異なりを感じたりするだろう。その自分の思いを取り入れたブックリストを作成することで読みを深めたい。それを友達と読み合い、読みの異なりや共通点、それぞれの思いや表現方法の多様さの良さに気付かせたい。また、ブックリストは全員に配布し、学校図書館にも置かせてもらうことで意欲を高め、ブックリストを読み返しながら生涯読書に親しむ子どもたちを育成したいと考えた。

2 研究仮説

いろいろな「読み」の観点を知り、自分の思いや考えを活かした表現活動につなげることで、作品をより深く味わい、読書の楽しさに触れながら読む力を高めることができるだろう。

3 研究内容

（1） 「読み」の観点を広げるための年間計画の工夫

（2） 作品を読み味わい、自分の思いや考えを表現するための工夫（ブックリスト作り）

日常的な取組 ① 読書に親しむための活動 ② 自分の思いや考えをもつための活動

4 成果と課題

〇はじめは漠然と本を読んでいた子どもも、いくつかの「読み」の観点を知り、自分の読書生活の中に取り入れられるようになってきた。作品をじっくり読んだり、自分なりの「読み」を表現したりすることで、読みの力が育ってきた。

〇学級でブックリストを作ることにより、「友達の薦めた作品も読みたい」という新たな読書意欲につなげることができた。

千葉市教職員組合

千葉市立松ケ丘小学校

矢野 碧

千葉市立鶴沢小学校

高橋 庸介

読みの力を高める指導の工夫

～好きな作品から感じ取ったことをブックリストにまとめよう～

1 主題設定について

「読む力を高める」とは

- (1) まず、多読を行う環境作りをする。その中で自分が面白いと思える本を見つけ出し、リテラチャーサークルの手法を用いた学習で「読み」の観点を学びながら、より深く本の内容を読み取り、自分の思いや考えを生活に生かすことのできる子どもを育成すること。
- (2) 友だちどうしで作品について紹介し合ったり語り合ったりしながら、作者の思いや作品の背景などを読み取る力を身につけること。この力を活かして生涯に渡って読書に親しみ、自分の思考力・判断力・表現力をよりよくしていける子どもを育成すること。

2 主題設定の理由

(1)現代社会の状況から

情報化、グローバル化が進む社会の中で、多様な生活様式や考え方が増えている。そのような社会の中に適応し、自分のやりたいことを実現していくためには、子どもたちが自分の考えをもち、判断し、表現する力が求められている。そこで、その土台となる読みの学習の中で、効果的な交流の場面を作りたい。その中で、自分の考えを大切に表現し伝えることで、読む力を高める方法を身につけさせたいと考えた。

(2)子どもの実態から

本校では朝読書を中心とした時間を確保して、子どもが本を読むことを習慣化してきた。中には本を選ぶことができない子ども、読字・書字に困り感を持つ子どももあり、その時間は「どうしたらいいかわからない」時間だったという。つまり、読書の量やその力に大きな個人差があるのである。

本学級の子どもは、大変元気で明るく、楽しい学習活動には積極的にとりくむことができる。また、与えられた課題にとりくむ姿勢も誠実である。だが、読書は好きと答える子どもが多い一方で、読み取ったことに対して、自分の考えをもったり表現したりすることは苦手な子どもが多い傾向にある(資料1)。そこで、本学級の実態をふまえて、年間の国語科指導計画を立てた。「川とノリオ」や「きつねの窓」では小集団読書であるリテラチャーサークルの手法を一部用いて、観点をもって読むことを学び(資料2)、「物語の読み方を知って、読書に興味をもった。」と答える子どもが増えた。考えながら読む力がついてきたといえる。

本研究では、自分がこれまで読んできた本の中から気に入ったものを選び、再読することで読み味わいながら筆者の思いを捉える。そのうえで、「自分ならこうしたい」と視点を変えたり、一部分を真似たり、自分なりの表現を付け加えた続編を考えたりする、などの翻作活動(注)を行った。子どもたちたちは、選ぶためにいくつもの作品を読む、真似るために何度も読む、という必要感がもてる活動を通して、その作品にある背景や、人としての考えに共感したり、違和感をもったりするだろう。それぞれの作品や作者の物の見方や感じ方を、翻作するために何度も読み返し味わわせたい。そして最後に自分の読みに対する考えを取り入れたブックリストを作成し、友達との読みの異なりと共通点、人間の普遍的な思いやあり方に気付かせたいと考えた。

注…首藤久義氏は、「何らかの原作をもとにして、それをなぞって声で表現したり、文字で表現したり、(中略) いろいろな方法で表現すること」を「翻作表現」とし、そういった活動を通して学習する方法を「翻作法」と名付けた(桑原隆監修、首藤久義・卯月啓子編著、桑の実会著『翻作法で楽しい国語』東陽出版社、2004より)。

2 研究仮説

いろいろな「読み」の観点を知り、自分の思いや考えを活かした表現活動につなげることで、作品をより深く味わい、読書の楽しさに触れながら読む力を高めることができるだろう。

3 研究内容

(1) 本活動を支えるための授業計画の工夫

① 授業計画の工夫

※井上一郎『読む力の基礎・基本—17の視点による授業づくり—』明治図書 2003年 参照

月	四	五	六	七	九	十	十一	十二	一	二	三
単元名	紙風船 純銀もさいく	薫風／迷う	森林のはたらきと健康	川とノリオ	イナゴ	きつねの窓	ぼくの世界、君の世界	・私の大切な一冊 ・伊能忠敬	君へ	二十世紀に生きる君たちへ	好きな作品から感じ取ったことをまとめよう(自作)
主な指導事項 (読むこと)	C ア ・エ C	C イ ・ウ C	C ウ	C エ ・オ C オ	C エ ・オ C オ	C エ ・オ C オ	C ウ ・オ C オ	C オ ／ C エ	C オ	C ウ	C エ C(2) エ
特に留意した点(※)	・一行の言葉で作品の雰囲気が変わる (覚えながら読む)	・作品に対する自分の意見を、立場を明らかにして読む(評価しながら読む)	・説明文の内容を押さえ、自分の考えをもつ(関わりのある資料を読む)	・役割に沿って読み、優れた表現や心情を読む(優れた表現を読む)	・一つの言葉から作品の世界が広がる (覚えながら読む)	・心情の変化を、根拠を探しながら読む(要約)	・筆者の考えをもとに、自分はどうかと考えながら読む(比べて読む)	・これまで読んだ本から一冊選び、推薦する ・忠敬の生き方について、(自分と比べて読む)	・作者の思いを(探して読む)	・筆者の思いを受け、自分の今後の決意を表現する(作者の思いを探して読む)	・本を読み、自分が感じたことや考えたことを伝え合う(引用・要約するために読む)
ける取組	読みの力をつける 並行読書 読み聞かせ	本の紹介 →		リテラチャー	紹介 詩や文学作品の	リテラチャー	並行読書 読み聞かせ 本の紹介 →				ブックリスト作り

本学級の実態として、基本的な知識や決まった答えを出すことには自信があるが、考えや気持ちを話し合う場面になると「何をどう考えたらいいかわからない」子どもが半数以上いることがわかった（資料1）。そこで、観点をもって読むことに留意し、年間計画を作成した。伝えるためには、その方法を知ることが大切である。そこで、第6学年の最終単元を「好きな作品から感じ取ったことをまとめよう」と設定し、ブックリストにまとめることにした（注）。そこに向かう力がつくよう、「読む」単元での主な指導事項を確認しながら年間計画表の点を重視して学習を進めた。

注…ブックリストとは、テーマ別に作られた図書の推薦目録だが、その仕様は多岐に渡る。

昨今は本の内容紹介とお薦めの言葉がある電子書籍が多い。

本研究では、読みもののリストを作成して互いに読み合ったり、学校図書館に置き、自分たちが関わってきた全校の子どもたちに読んでもらったりすることを目的とした。そのため、内容の一部をより詳しく思いを込めて紹介する方法として、翻作法を取り入れたブックリストにした。

② 研究の実際

「きつねの窓」

単元について

本単元（「きつねの窓」）では、自分の読みを深めるための観点を子供たちが体感できるよう、読書会を位置づけた。学習指導要領「C 読むこと」の目標には「目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」とある。安房直子の「きつねの窓」にはファンタジーの世界への入口と出口があり、情景描写の美しさや不思議さ、青を基調とする幻想的な世界観がある。一人称で書かれた「ぼく」の心情がだんだんと移り変わる様子を味わいながら、自分との共通点や相違点を見つけ、興味を持続させて読み進めることができるだろう。その上で、ファンタジー作品の特徴である物語中のしかけのおもしろさにも気付かせたいと考えた。

そのためには、一人読みから全体の読みとまとめて終わるのではなく、それぞれに観点を与え、自分の考えとその根拠（理由）をはっきりさせて話し合いに参加してもらいたい。そこで、本を媒体としたコミュニティを成熟させる手法のひとつであるリテラチャーサークルを、実態に合わせて取り入れた（注）。

ともすれば話題が広がって終わってしまいがちな読書会だが、観点をもって読み、「友だちと話し合うことで、自分なりの考えをまとめる」という目的を持つことで、焦点を絞って話し合ったり読み込んだりする機会とした。

注…リテラチャーサークルとは、アメリカ・シカゴの元教師で読書教育研究者のH・ダニエルズらが提唱した手法である。同じ本を選んだ子ども同士がグループを組み、それぞれの役割を決め、それに沿って読書をする。その後、自分の役割の立場で話し合いをする。それぞれが違った読みの観点から本の内容や人物、作者について話し合うことで、一人では気付かなかったことにも気付いたり、考えが深まったりし、本の世界により親近感を持つとされる。日本にも10数年ほど前に紹介され、現在も各学年に適した指導法の研究が行われている。

・リテラチャーサークルの手法による読書会で身につけさせたい力

ア 読書会を行うことで、これまで漠然と読んでいた本に新たな魅力があることに気づくこと。

イ 今回は①疑問を持ち、答えを考えながら読む②情景描写や気になる表現への③登場人物の心情やイメージを捉えながら読む④言葉と言葉、表現と表現、作品と作品などのつながりから根拠を意識しながら読む、という4つの観点を利用して読む力。

・主な手立て

ア 「川とノリオ」では4人のグループで読書会を行った。しかし、話し合いに参加しきれない子どもがいたため、より発言の機会を増やすため、3人グループにした。足りない役割が出るため、「つながり」はグループ全員で話し合うようにした。

イ 全員が自信をもって話し合えるよう、読書会を行う前に、同じ役割の子どもたち（課題別グループ）で集まって内容を交流してから元の読書会グループ（ジグソーグループ）に戻るジグソー学習を取り入れた。

ウ グループで話し合う時は、それぞれのグループが集中できるように教室配置を変え、3人グループが円上になり、2人が外側を向くようにした。円の中に拡大した本文を並べておくことで、子どもたちは話し合いの終わったグループから書き込みに行き、時間の短縮にもつながると考えた（資料編P3資料2）。

エ 全体で話し合う際には、学級の中で意見が活発に出る道徳の時間のように、ノートと筆箱のみを持ってみんなで黒板の前に座って話し合った。

※読書会の指導計画と様子に関しては資料2を参照。

・成果と課題

- 3人グループにすることで、全員が発言する機会を増やすことができた。
- ジグソー学習を取り入れたことで、課題別グループで交流する際、読み取りの苦手な子どもたちへの支援になった。また、どの子もジグソーグループでは、自信をもって自分の役割を発言していた。
- グループ別の話し合いを円状にしたことで、他グループの話し合いがあまり聞こえず、集中できたという意見が多かった。また、拡大コピーをした本文に書き込む祭も、混雑を避けて空いているところから書き込む様子が見られ、時間の短縮につながった分を全体での話し合いの時間に充てることができた。
- 一人では分からなかったことが、話し合いを通して分かり、作品の奥深さを感じることができた。
- グループでの話し合いは活発だったが、友だちの意見や拡大本文の言葉を写して終わる子たちもいた。一人一人が自分の考えをもてたとは言えないと感じた。



そこで

全員が一人読みをする必要性を感じ、自分の思いや考えを活かした表現活動つなげることで、作品への考えが深まり、読書の楽しみを知ることができるだろうと考えた。

(2) 作品を読み味わい、自分の思いや考えを表現するための工夫

研究の実際

・ブックリスト『本の宝箱』の作成

「好きな作品から感じ取ったことをまとめよう」

～6年1組オリジナルのブックリストを作ろう～

・単元の目標

○これまで読んできた本の中からリストに入りたい作品を選ぶことができる。

(関心・意欲・態度)

○自分が選んだ作品を読み見返して翻作しながら、自分の思いや考えを伝えることができる。

(読む(1)エ)

○選んだ本の内容や構成、表現の工夫を理解しながら推薦の言葉を書くことができる。

(読む(2)エ)

・評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・今まで読んだ本の中から、今の自分のお気に入りを選ぼうとしている。 ・その作品の良さに気づき、自分の考えを深めるために表現しようとしている。	・本を読み、選んだ理由や言葉を換えて考えたことを表現しようとしている。 ・出来上がった作品を友だちと見合い、共通点・相違点に気づき、自分の考えに生かそうとしている。	・選んだ作品の構成を理解しようとしている。 ・表現の工夫を見つけ、翻作することの効果について考えようとしている。

ブックリストの総合的な評価規準

A	選んだ個所を進んで翻作することで、思いや考えを効果的に伝えられる。
B	選んだ個所を翻作し、自分の思いや考えを伝えられる。
C	Bの条件を満たしていない。

・単元について

本単元では、自分の読みを深めるための観点をもとに、子どもたちがこれまでの読書生活の中で特に気に入った作品を扱う。井上一郎氏は『読む力の基礎・基本—17の視点による授業づくり—』(明治図書2003年初版)の中で、『作者への旅』の読書行為法について、「『作者への旅』は、『探して読む』目的的な課題読書の一つの学習課題であり、様々な種類のテキストを探索する能力を育成することになる。(後略)」とした。そのためには「ひたすらに読む」ことや「原文や創作したものを編集する」ことで、読書行為に編集能力を統合した学習の必要性を論じている。

本学級にはなかなか自分の考えを伝えられない子どもたちもいる。しかし、文の中からなら今の気持ちに合った言葉を探し、自分の思いや本を読んで考えたことを伝えられるのではないかと考えた。そこで、翻作法を利用して1冊の本にまとめた。それを学級全員が持ち、

友だちの作品も読み合えば、新たな読書意欲にも繋がると思ったためである。また、相手意識を高め、自他ともに文学作品を読み続ける態度を育成する目的で、学校図書館に置いてもらうことにした。

たくさんの人に自分の思いを伝えるためには、一人読みの段階で自分の考えとその根拠(理由)をはっきりさせてとりくんでもらいたい。そこで、3種類用意したワークシートから選んで作成する際には、交流をせずにじっくりと一人でとりくむ時間を確保した。それぞれが異なった読みの観点から本の内容や人物、作者について向き合うことで、自分自身の考えを深め、本の世界の魅力を感じてもらうためである。

・本単元で身につけさせたい力

ア ブックリストを作成することで、自分で再読したり視写したり考えたりする行為を繰り返し、これまで漠然と読んでいた本に新たな魅力があることに気づくこと。

イ 作品を翻作することで、選んだ理由や言葉を換えて考えたことを表現する力。

ウ みんなで作品(ブックリスト)を作り上げるために、分類し書籍の体裁を整え、読書への新たな意欲へとつなげる力。

・主な手立て

ア 「川とノリオ」「きつねの窓」で学んだ「読み」の観点を想起させる手引きの作成。

これまでの学習を活かしながらとりくむことができるよう、全員に配布し、教室にも掲示した(資料3)。

イ 3種類のワークシートと教師見本

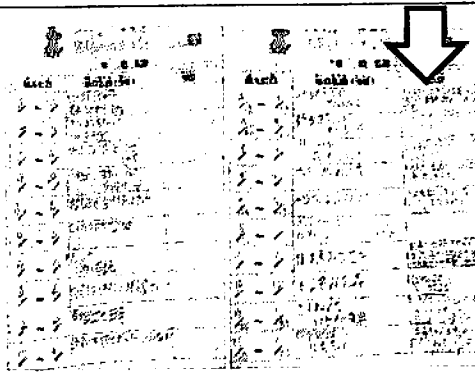
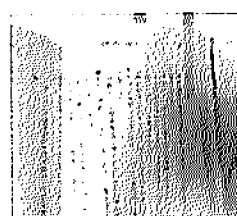
本学級の子どもたちは能力差が大きい。短い文章であっても読み進めることが困難な子どももいる。そこで、主に読み物での書き換え・創作を基本とし、詩や俳句、和歌も扱ってよいことにした。易(一部を書き換える)・中易(一部を書き換えて表現を足す)・難(視点を換える)と、それぞれの見本を例示した。本を限定しなかったのは、ブックリストなら低学年用から高学年用に分けられ、絵本や読み易い詩も選べるためである。これにより、単元の狙いである自分の「思いや考えを伝える力」をどの子にも身につけさせたいと考えた(資料4・5)。

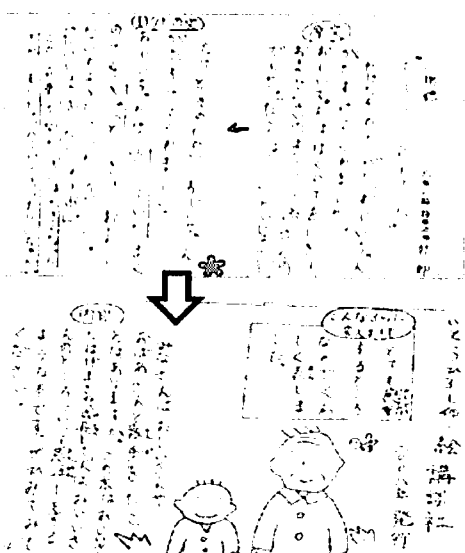
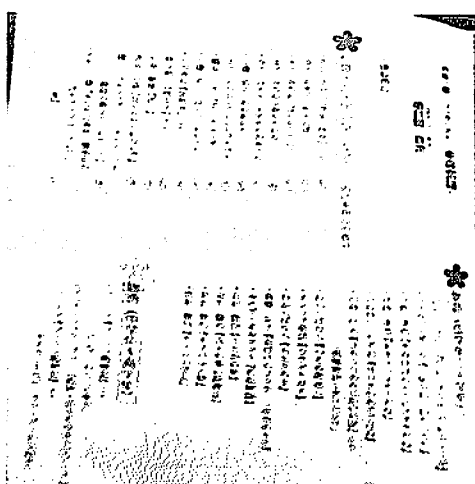
ウ ブックリストの作成による相手意識(交流を生かして)

ブックリストは全員に配布し、学校図書館にも置くことを伝えた。子どもたちは、高学年だけでなく全学年が読めるように選書した。その際には、本の内容が重ならないように互いに交流しながら選書した。内容を要約する・考えをわかりやすく伝える・おすすめの言葉を考える翻作を個人で行った後には、互いに交流し推敲し合った。また、本の装丁を考える活動も行い、学級で話し合いながらまとめた。

・指導計画と子どもの様子(本単元 10時間計画)

次	時	主な学習内容	○指導上の注意点 ◆評価
0次	日常	○朝読書と読書記録の推進。 ・朝自習例(次ページ)	○朝読書だけでなく、時間を見つけて読書や読書記録ができるように声をかける。

		<table><tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td></tr><tr><td>読書</td><td>ドリル</td><td>読書</td><td>ドリル</td><td>読書</td></tr><tr><td>本の紹介</td><td>算数</td><td>読書</td><td>国語</td><td>読書</td></tr><tr><td>読み聞かせ</td><td></td><td></td><td></td><td>月1で読書記録タイム</td></tr></table> ・その他の時間 図書室の利用時間（週1回） 雨の日の休み時間 課題が早く終わった時 など	月	火	水	木	金	読書	ドリル	読書	ドリル	読書	本の紹介	算数	読書	国語	読書	読み聞かせ				月1で読書記録タイム	 同一児童の読書記録。右が11月後半。次第に感想を書くようになり、内容も詳しくなっていた。
月	火	水	木	金																			
読書	ドリル	読書	ドリル	読書																			
本の紹介	算数	読書	国語	読書																			
読み聞かせ				月1で読書記録タイム																			
日常		○教室にみんなが持ち寄った本で文庫を設置する（5月から）。 休み時間には、文庫で本を探す姿や読書をする姿が多く見られるようになった。 	○本の取り扱いや学級でのルールについて指導する。 ◆積極的に文庫作りやイベントに参加している。 この本の続編が気になるな。今度買って読もう。																				
1次	1	○教師の見本を全体で読み、翻作という方法について知る（資料3）。 ○ブックリストにのせる本を決めるために、何冊かを再読する。	○教師が作成した資料をもとに、翻作の注意点などを確認する。（資料4） ○教師見本は「詩」や「文学」とし、それぞれ翻作の仕方を変えて紹介する。																				
	2	○ブックリストにのせる本を決め、メモや付箋を利用しながら読み返す。 ↓ A児が読書中の本 	○一年間で学んだ観点をヒントにして表現するよう助言する。 ○教師手本の拡大コピーを掲示する（一人読みが進まない子どもが参考にするための支援として）。 ◆自分の考えを持って選んだ作品を読んでいる（メモ・付箋）。																				
	3 4	○自分で読む→文章を選び言葉を考える。 ・ワークシート（資料5）に本文を視写しながら変えたいところに傍線を引く。 ・自分の考えをもとに表現を換える。	○分からない言葉は辞典などで確認しながらあらすじをとらえさせる。 ◆あらすじをとらえている（ワークシート）。 ○一人読みの時間を十分に確保し、自																				

	付箋部分を元に、何度も読み返す様子。 	分の考えをしっかりと持たせる。 「本を読んで初めて感動の涙が出た…。」これにしよう。
5	○どのような内容で、なぜそのように表現したのかをワークシートに書く。	○余裕がある子どもには、3 作品まで作成してもよいことを伝える。
6	○近くの友だちと交流し、アドバイスをしあう。 ↓B 児の作品 	○アドバイスをもとに、説明したり付け加えたりする (2 人組) ○本文に照らし、根拠を示しながら話し合うよう助言する。 ◆互いの考え整理しながらアドバイスをし合っている (聞き取り)。 A「おれのおいちゃんも、こうだったんだ。」 B「じゃあ、それも紹介しながら伝えたら。」 A「なるほど。呼びかけるように読めてみようかな。」
7	○全体で項目立てや題名を話し合う。	○項目に沿って載せる順番を決める。
8	主な意見 C「<u>物語とそれ以外では分けたほうが見やすい</u>と思います。」 D「<u>物語は低・中・高学年にするのが選んで読みやすい</u>と思います。」 E「<u>紹介の本として、目次や「はじめに」</u>なんかもつけたいです。」 F「<u>目次はきれいなほうがいいからパソコンで打つのがいいよ。</u>」 G「<u>後ろの本の情報(奥付)</u>もつけよう。」 H「<u>中学年は読みの差に幅がありそうで分けにくい</u>です。中学年はどちらにも入るようにするのはどうだろう。」(賛成) I「<u>はじめと最後は、みんなが考えた言葉</u>にしよう。」	 いろいろな意見をまとめることで、子どもたちにとっても愛着のあるものになっていった。項目は H さんの意見が通り、3 項目立てになった。
9	○製本するために、必要な「はじめに」と「おわりに」の部分を話し合う。	○この活動の振り返りになるようにする。

		何度でも本を読み返したことで、視点を換えたり気持ちを入れたりした翻作の楽しさが伝わる文になった。	おわりに みなさんどうでしたか。読んでみたい本はありましたか。この企画は六年組のみんなで話し合いながら楽しく活動してきました。私たちがこの活動を通して、本を読むだけでなく、考えたり感じたりすることを楽しむことができたことをうれしく思います。みなさんも本を読んで味わうのを楽しんでください。死に入らないうちに、ぜひ読んでください。 (平成二十六年度六年一組一四)
10	○製本したブックリストを読み合い、感想を伝える。	○自分たちで最後に作り上げたブックリストを楽しみながら読む。	
2 次	日常 ○読書活動の中に、視点をもった読みを取り入れながら読む。	○ブックリストから次に読みたい本を見つけ、後の読書活動に活かす。	

図書館活用し、担任の文庫に「有名作品文庫」を追加して、それらを読む時間をとった。
また、難解な内容のものはブックトークで紹介した。

⑤ 音読方法の工夫

本学級では、毎日カードを使った音読の宿題を出してきた。教科書はもとより、よりたくさんの方の良作に触れてもらおうと、教師が提示した詩や千葉市作文集「ともしび」の作品を指定するなど、季節や学習内容、今必要な道徳に関連するものを多く取り入れた。

学習中の音読は、教師の範読、暗唱やリレー読み（好きなところを読んで交代する。3行以内）、たけのこ読み（自分の読みたい1文を決めて音読する。）ぼく・わたし読み（登場人物を「ぼく」「わたし」で見分けながら読む。）などを取り入れた（資料11 参照）。

（2）自分の考えをもつ活動

① ミニ討論会

自分の意見を持ち、発信することの楽しさを味わってもらおうと、朝自習の時間に行った。「海派か山派か」などの簡単な題からはじめ、必ずどちらかに分かれる。同じ意見の近くの友だち2～3人と5分間話し合い、より反対意見の人を説得できる意見を出し合う。5分間の討論をし、意見が変わったら動いてもいいことにした。短い時間で行うことで、討論はとても活発になり、指名やまとめも自分たちで行えるようになった。

② 読書カード

読書カードを書くのが苦痛で、読んでも書かない、または読まないという子どもが多かった。そこで、読書カードを簡略化し、感想は無理に求めなかった。また、全校で実施していたブックウォーク（自分で短期間の目標を決め、達成できると認定書がもらえる。）を有効活用し、記録をつけることの大切さを学ばせた（指導計画・0次より）。

6 研究の成果と課題

（1）子どもたちの変容（資料8）と感想（資料8－2）

（2）成果

- 全体的に時間を見つけては読書をする姿が多く見られるようになった。
- ブックリストを作るために、読書記録に感想を書くようになった子どもが増えた。
- リテラチャーサークルで、「読み」の観点を学び、ブックリスト作りをすることを早めに伝えたことで読書量が増え、ブックリスト作りをスムーズに行うことができた（資料9）。
- 「本を読むのが苦手」と言っていた子どもたちの中には、これらの学習を通して「本はためになるし、面白いという意味が分かった。」「普段からもっと本を読んでいけばよかった。」と、毎日本を手取るようになった子どもも多かった。
- 書くことに困り感を抱えていた子どもたちも意欲的になり、ひらがな表や辞書を手元に置いて何度も調べながらブックリストを作っていた。
- 作品を読んで、思いや考えを伝える力をつけるために、翻作法は有効だった（資料10）。

（3）課題

- 3種類のワークシートの中で、自分で自由に書けるものを選んだ子どもが多かった。ワークシートの熟考が必要だった。
- ブックリスト作りの汎用性を検証するために、現在は、第1学年での翻作学習を行っている。他学年での発達段階や実態に応じた実践を継続していきたい。

資料編

資料1	事前調査（4月）……………P1
資料2	「きつねの窓」の実践……………P1～4
資料3	翻作の方法と説明（児童用）…P4
資料4	教師見本……………P5～7
資料5	ワークシートの種類……………P8
資料6	評価の実際と子どもの作品……………P9～11
資料7	ブックリストで使った本……………P11～13
資料7-2	翻作方法の選択……………P14
資料8	子どもたちの変容……………P14
資料8-2	子どもたちの感想……………P15
資料9	読書冊数の変化……………P16
資料10	取組後の意識の変化……………P16
資料11	主な参考文献……………P17

資料1 児童の実態（事前調査）

表1（事前調査）

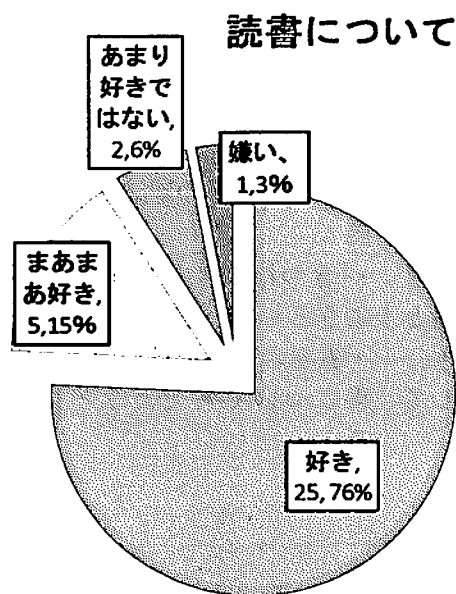
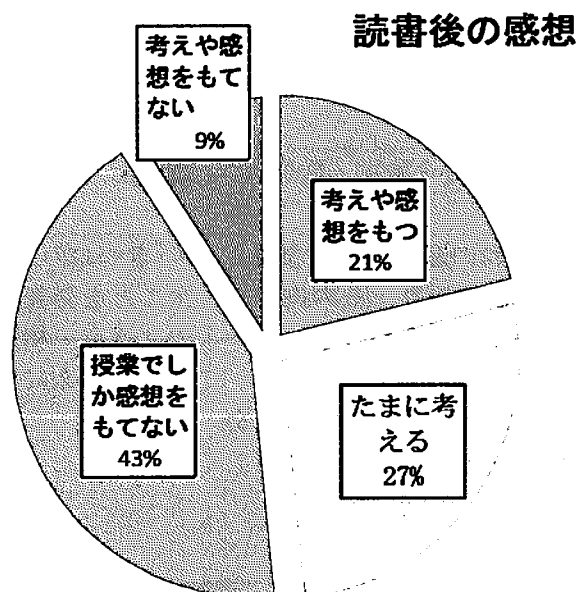


表2（事前調査）



考察

本学級の児童は、5月からみんなで学級文庫作りに取り組み、友達が好きな本や薦めてくれた本を手取る環境であった。自由読書の時間がなかなかとれない、読んでいる本が厚いものになってきた、など個人によって読書状況は様々である。事前調査では、「読書が好き」「まあまあ好き」を合わせると、91%の児童が読書に前向きな思いを抱いていることが分かった（表1）。しかし、同時期に行った「読書後に自分の考えや感想をもつか」という質問に対しては、「考えや感想をもつ」「たまにもつ」児童は48%と大幅に減り、「学習中にしか考えや感想をもてない」または「考えや感想をもてない」児童が52%と半数を超えていた（表2）。このことから、読むことは気軽にできるが、そこから考えや感想をもつことは、事前調査時の子どもたちにとっては難しいと感じられていると言えよう。

資料2 「きつねの窓」の取組

「きつねの窓」で用いた観点

①はてな係（疑問・批判）…青

- ・なぜ、こんなことを言ったのか。 ・〇〇はどんな気持ちなのか。 ・自分だったら～。
- ・なぜ、こうしたのか。 ・作者が伝えたいことは何か。 ・みんなで考えたいこと。

②表現係（情景描写・気になるところ）…緑

- ・～の場面が〇〇で感動した（心に残った）。 ・～という言葉がいいなあと思った。
- ・～という文章はこの物語で大切な言葉じゃないか。

③イラスト係（グラフ・マップ・絵）…オレンジ

- ・物語を読んで心に残った場面を想像して絵・グラフ・マップで表す（理由を説明する）。

④つながり係（現実とのつながり・物語中のつながり）…赤

- ・今まで読んだ本とここが似ていた。 ・自分にも同じような経験があって、～。
- ・〇〇の場面に～と書いてあるから、きっと□□だったのかな。 ・この表現はこことつながる。

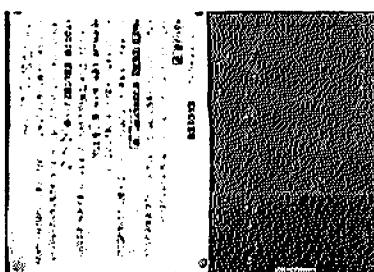
単元の目標

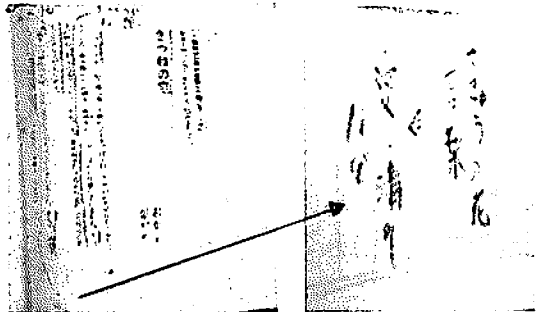
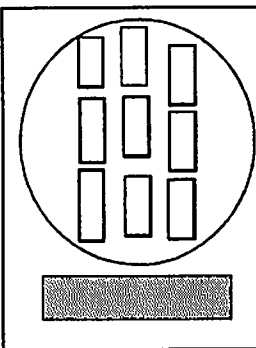
- 「きつねの窓」を、様々な視点で読み取り、その内容について話し合うことで、自分の考えを広げ、読書の楽しさに気づくことができる。
(関心・意欲・態度)
- 「きつねの窓」を読んで考えたことを交流し合い、自分の考えを深めることができる。
(読む(1)オ)
- 「きつねの窓」の構成や表現の工夫を理解することができる
(言イ(キ))

評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・「きつねの窓」を様々な視点から読み取り、その内容について話し合おうとしている。 ・読書の楽しさに気づき、自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。	・「きつねの窓」を読んで考えたことを発表し合い、友達との共通点・相違点に気づき、自分の考えに生かそうとしている。	・「きつねの窓」の構成を理解しようとしている。 ・表現の工夫を見つけ、その効果について考えようとしている。

指導計画（8時間計画 ※計画内容中の太線は、前回と変えた所）

次	時	主な学習内容	○指導上の注意点 ◆評価				
0次	日常	○朝読書の推進と読書記録をつける。	○朝読書だけでなく、時間を見つけて読書や読書記録ができるように声をかける。				
		○教室にみんなが持ち寄った本で文庫を作る。	○本の取り扱いについて具体的に指導。 ◆積極的に文庫作りやイベントに参加している。				
1次	1	○単元の「登場人物の心情の変化を考えて読む」にあるねらいをつかみ、単元全体の見通しをもつ。 ・「きつねの窓」をリテラチャーサークルの手法を用いて読むことを知る。 ・リテラチャーサークルの役割を確認する。 <table border="1"><tr><td>①はてな係</td><td>②表現係（情景描写・気になる言葉）</td></tr><tr><td>③イラスト係（イメージ探し）</td><td>④つながり係（全員で考える）</td></tr></table>	①はてな係	②表現係（情景描写・気になる言葉）	③イラスト係（イメージ探し）	④つながり係（全員で考える）	○リテラチャーサークルの手法を活用し、一人一人が自分の考えを持って読書会をすることを伝える。 ○「川とノリオ」での学習を想起し、新たな方法で 全員で考える場を設けたことを伝える。  左と同じプリントと、本文のコピーを子供たちに配布した。
	①はてな係	②表現係（情景描写・気になる言葉）					
	③イラスト係（イメージ探し）	④つながり係（全員で考える）					
2	○「きつねの窓」を読んで、初読の感想をノートに書き込む。 ・一番心に残った場面や表現 ・不思議に思ったこと など	○本文のコピーをノートに貼らせる。 ○役割にある視点をヒントにして感想を書くよう助言する。 ◆自分の考えを持って「きつねの窓」を読んでいる（ノート）。					
3	○あらすじをつかむ ・3つの場面にわけ、小見出しをつける。	○分からない言葉は辞典などで確認しながらあらすじをとらえさせる。 ◆あらすじをとらえ、場面に合った小見出しをつけている（ノート）。					

4	○役割に沿って自分で読む。 ・自分の考えをノートにメモする。 (ノートの上部分に本文を印刷した紙を貼り、下に意味や考えをメモする。)  ○役割ごとに集まり、確認し合う。	○一人読みの時間を十分に確保し、自分の考えをしっかりと持たせる。 ○役割ごとに線の色を分け、自分がどの役割で読んだのか一目で分かるようにする。 <table border="1"><tr><td>①はてな係</td><td>青</td></tr><tr><td>②表現係</td><td>緑</td></tr><tr><td>③イラスト係</td><td>橙</td></tr><tr><td>(④つながり係)</td><td>赤</td></tr></table> ○余裕がある子どもには、自分の役割以外のことで気付いたことをノートに書き込んで良いことを伝える。 ◆自分の役割で、人物の心情や物語の世界を想像しながら読んでいる(ノート)	①はてな係	青	②表現係	緑	③イラスト係	橙	(④つながり係)	赤
①はてな係	青									
②表現係	緑									
③イラスト係	橙									
(④つながり係)	赤									
5	○リテラチャーサークルの手法を取り入れて読書会をする(1の場面)。 ・話し合いに集中できるよう、教室配置を右のようにし、円上に3人ずつの席を置いた。中央に拡大した本文とマジックを数組置き、話終わったところから線と言葉を書き込んだ。 	○グループは3人とし、4人グループになった場合は④つながりの役割を受け持つようにする。 ○話し合いでは、本文に照らし、根拠を示しながら話し合うよう助言する。 ○最初にはてな係から疑問を提示し、それについて話し合うよう助言する。 ○はてな係は司会の役割も兼ねる。 ○話し合いが進んでいるかを確認しながら机間指導をし、進んでいないグループには助言をする。 ◆互いの考えの共通点や相違点を整理しながら話し合っている(ノート)。								
6	○読書会をする(2の場面)。	○役割を変える。(同上)								
7	○読書会をする(3の場面)。	○役割を変える。(同上)								
8	○全員で学習を振り返る。 ・全員中央に集まり、周りを本文のコピーで囲むようにし、順に黒板に貼った。 ・物語全体を通して、自分が感じたことや考えたことをノートに書いて話し合う。 話し合い(終末) E「きつねの窓のきつねは作者で、「ぼく」は読者だったんじゃないかな。」 F「窓はきつかけに過ぎない。それは独りぼっちじゃないよというメッセージだったのかも。」 G「きつかけがあれば悲しくもなるし幸せにもなる。そこからどうするかは自分次第だということだと思う。」(賛成多数で次の日のめあてになる。) H「今いる家族や友達を大切にすることの重要さに気づかせてくれたのかもね。」 I「これは安房さんが物語に込めた思いだと思う。」	○みんなで話し合いたい部分を順に出し、話し合う。 ○色々な読み取りがあって良いことを伝える。 ○ノートにメモをとりながら話すよう促す。 ◆読書会を通して物語の楽しさやいろいろな読みの視点に気づくことができる(ノート)。 子どもたちの話し合いから(下線は理由) ※「出口」の場所がどこかで意見が分かれていた。 A「ファンタジーの出口は、次の日からじゃないの。この日はまだ手が青いんだよ。おかしくない。」(賛成5) B「手を洗ったところとも考えられるよ。(きつねとの思い出)全部なくなったから。」(賛成8) C「でも、最初に森に入った所が入口だったから、森から家という日常に帰ってきた所じゃない。」(賛成多数) D「最初と繋げて考えれば森か。深いな。」…(全員賛成)								

2 日 常	○読書活動の中に、これまで学んだ観点を 取り入れながら読む。	○読書をし、記録をつけることができるか (読書記録カード)
-------	-----------------------------------	----------------------------------

(2) テックリスト作りの取組

資料 3 翻作の方法と説明 (児童用)

物語を読むとき

翻作をしながらお気に入りの物語を紹介しよう。

翻作法とは、原作にした作品の内容や表現方法を学び、自分の考えを表現する力を
める方法の一つです。はじめから「いいところ・いいところ」と思いながら読むよりも、
より、作品の内容を理解でき、さらに表現するところによって自分の考えを確かにする
ことができようになります。

やり方

- ・今まで読んだ本や、気に入った物語をみつけて、「いいところ」読み返す。
- ・なぜ「なるほど」「いいところ」「いいところ」と思った場所を「エピソード」(または好きな言葉)。
- ・「自分もそう思う」「続きや前の部分を想像して表現を足す。
- ・「自分はこうだったらいと思う」「その部分を違う表現に換える。
- ・「この登場人物はどう思っただろう」「その人(動物)の視点で表現する。
- ・「いいところ」。「そのまますべて」と思ったところを「いいところ」。

☆最後に、自分の思いが伝わるように、説明をして、話の言葉をしていこう。☆

(ジャンル・場面・登場人物)	大まか 1 場面	作者・作品・内容など
・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場)	・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場)	作者・作品・内容など ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場) ・ 登場人物の登場 (登場人物の登場)

資料4 教師見本…大型テレビに映し、説明しながら紹介して一つは実際に書いて見せた。
見本① (表現を換える。)

(時)

六年 一組 氏名 ○○○○

お気に入りの原文

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
やめるはひるのつき
いちめんのなののはな

こう変えてみました ←

いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
いちめんのさくらそう
ひかりかがやく未来へ
いちめんのさくらそう

作者・作品・内容など

山村喜島「純粋もさいく」

『山村喜島全集 第一巻』彌生書房 一九六一年

「いちめんのなののはな」が広がる風景を見てい
る作者は、病気で寝ている状態なのではないか
と学級で話し合いました。さわやかな風景の中
にも少しのものの悲しさ、切なさを感じられます。

考え・感想

もうすぐ卒業をひかえた自分たちの気持ちと重なる
よう、卒業式にたくさんかざられるさくらそうにし、
卒業していくものの悲しさと未来への希望を表しました
みなさんには、どのような情景が浮かびますか。ぜ
ひ元の詩も読んでみてください。

見本②（表現を換えて文章を足す）※大型テレビに写しながら、実際に子どもたちの前で実際に書いていったもの。

（物語）

六年一組 氏名 矢野 碧

歴史に平和が記されることはない。

人は歴史を構築するための前車である。しかし、それでも人は人として

生きる。人を愛し子を育み、友を助け

敵を許し、共に笑い、幸福な生活を望み、人生を築いていく。そして、それが

歴史に記されることは決してないのだ。

作者・内容・時代背景など

（作）トルストイ（一八六六年～一九一〇年）

戦争と平和（一）イーストプレス、一九七一年

（内容）

作者がクリミア戦争に行った経験

をもとに、平和を願う人間の良心と愛を描いた長編小説。

（時代）

十九世紀ロシア。

こう変えてみました

これまで、歴史に平和が記されることはなかった。人は歴史を構築するための前車にすぎないかもしれない。しかし、それでも

人は人として生きる。人を愛し子を育み、友を助け敵を許し、共に笑い、幸福な生活を望み、人生を築いていく。そんな平和が続けば、それはいつか、歴史に記されるだろう。きっと、いや、必ず。

考え・感想

社会で戦争のことを学んだ時に心が痛んだ。平和な国に生きる私達は、この平和が続くよう、一人ひとりが力をつくしていきたい。そう強く思い、取捨を、今日日本に生きる人間なら、それはの感覚でかえた。みなさんはどう思いますか。ぜひこの本を手にとり、平和について考えてみてください。

（物語）

六年 一組 氏名 矢野 碧

残雪は、むねのあたりをくれないにそめて、ぐったりとしていた。しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げた。そして、爺さんを正面からにらみつけた。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようであった。

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわがなかった。それは、最後の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと、努力しているようでもあった。

大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しているような気がしなかった。

こう変えてみました ← 残雪目線

胸が熱い。傷は深いな。むねがくれないにそまってしまった。だが、まだ戦いは終わっていない。あのじいさんがどめをさしにきた。もうおれに力は残っていない。でも、気持ちでまけてなるものか。せめてにらみつけてやる。

情けない姿は見せてやるものか。苦しくても顔を上げよう。仲間を守った頭領として、立派に最後の時をむかえるぞ。来るなら来い。たとえかなわなくても、これまで大事な仲間を守ってきた頭領の意地を見せてやる。

…おや、じいさんの様子がおかしい。涙ぐんでいるのか。

作者・作品・内容など

椋鳩十「大造じいさんとガン」教育出版・『ひろがる言葉 小学国語5上』より

・この物語は、大造じいさんの昔の話です。狩人の大造じいさんと、知恵のある大物のガン、残雪との戦いの日々が数年にわたってえがかれています。様々なわなを仕かける大造じいさんは、とうとう、仲間を守って傷をおった残雪に近づくことができたのですが…。

考え・感想

この場面は、私が一番感動した場面です。大造じいさんが見た残雪は、深い傷をおっても堂々とした態度でいます。その時の残雪の気持ちを考えてみたくて、残雪の視点で翻作をしました。人間も動物も変わらず持っている意地や仲間への思いが表れるように、心の中の言葉として表してみました。

みなさんはどう感じますか。ぜひ読んでみてください。

資料5 ワークシート

①短歌や古典など、時代背景の解説がしやすいもの ②物語・詩など、変化が分かりやすいもの

()
()
年 組 氏 名

作者・内容・時代背景など

考え・感想

こう変えてみました

()
()
年 組 氏 名

こう変えてみました

考え・感想

③自由記述型のもの

()
()
年 組 氏 名

ワークシートは、見本で使ったものの他に、子どもたちの意見から、自由に記述できるものを用意した。3種類のワークシートはどれも同じくらいの使用頻度であったが、翻作に対して思い入れの強い子ほど、引用部分のこだわりから、自由記述型のものを使用することが多かった。

資料6

・評価の実際

「読むこと」に関するこれまでの評価

評価	評価規準（ノート・ワーク・発言から）	人数
A	自分の考えをもち、理由をつけて伝えることができる。	8人
B	自分なりの考えをもつことができる。	18人
C	Bの条件を満たしていない。	7人



ブックリストの内容評価

評価	評価規準（ブックリストの内容から）	人数
A	選んだ個所を進んで翻作することで、考えや思いを効果的に伝えられる。	23人
B	進んで翻作する個所を選び、自分の考えを伝えられる。	9人
C	Bの条件を満たしていない。	1人

A評価の作品ア

★

梅の花

あるじなしとて
春をわするな

こちふかば
においおきたよ

（短歌）
作者：菅原道真
作品：拾遺集、雑喜
年：平安時代初期
内容：春を告げる東風がふいたからその良
においを私から行く大宰府まで送っ
ておく、梅の花より家の主人をよすれ
るな、こちふかばという歌です。

感想：考え？

短歌は昔の言葉なので変えるのがむ
すかしいかな。この詩は卒業、ほか
ので選んだ。きくと作者はここをこ
はなれるのがさびしくてその気持ち
を短歌にしたのですね。切ないけれど
飛び立つ勇氣ももうある短歌でし
た。みなさんも色々な和歌に親しんで
みては？きくとすてきな気持ちや発展
がまっているでしょう。

（変えてみました）

こちふかば
においおきたよ
さくらそう
卒業しても
すべてわすれぬ

★

※今の自分の気持ちと会うような作品を選び、辞書を引ながら最後の語形を変えていた。
感想では、考えや思いがよく伝わり、薦める言葉への移行もスムーズである。

(昔の草)

大正二年 陽曆

まろえん道具にはがき、いすもそれ
見ている方はたまになくなくなくて
る人だよね。

ちうちう道具にはがき、いすもそれ
のかき、いすもそれを見ている方は
も、となにもおもうにうわ。

（読者内閣・時代調査を）

作弦川 司 徒然草 ち文記
二〇〇年 発行

この本は短べんになつてゐるが、だれ
も読めやすし本になつてゐる。た
のし話やもうおわりといふ内容も
あまぞみてみてくだい。

（読者内閣・時代調査を）

この本は、ほくみたに長編を讀む
のか、かてな方にあつて、すめです。
でも、さうなつと讀みた、めとす、いふ
うな、長べんの本を讀みあつるのも、よ
かまし、いふやん。

せ、読んでみてくだい。

★

（読者内閣・時代調査を）

自分の考えよりお薦めの言葉が多くなってしまっていたため、Aにはならなかったが、自ら選び考えることができるようになった。

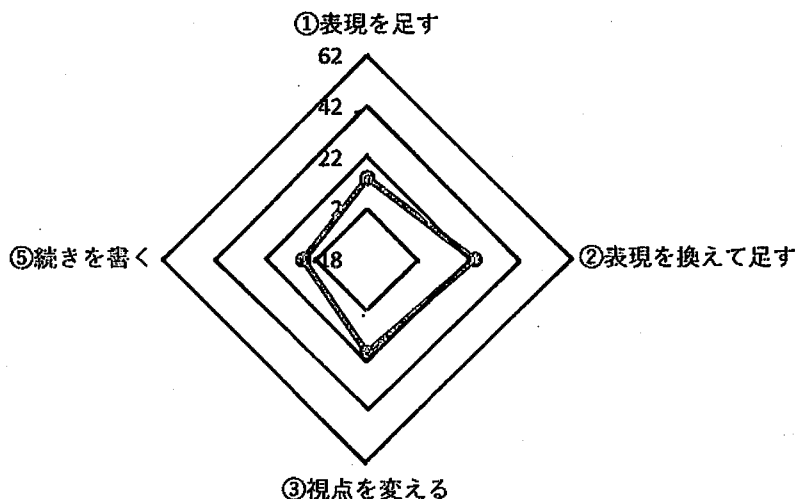
翻作の種類 (今回④で示した「写して線を引く」のみの子どもはいなかった。)

- | 作品
番号 | 作者 | 作品 | 出版社・年 | 翻作の種
類・備考 |
|------------|--------|---------------------------|--------------------------|--------------|
| 短歌・詩・ずい筆など | | | | |
| 1 | 菅原道真 | 『拾遺集 雑春』 | 国土社・1991年
『春の名句と季語』より | ①・短歌 |
| 2 | 金子みすゞ | 「竹とんぼ」
『みすゞこれくしょん』 | 金の星社・2005年 | ②・詩 |
| 3 | まど・みちお | 「ぼくがここに」
『まどみちお全集』 | 理論社・1994年 | ①・詩 |
| 4 | まど・みちお | 「おちゃわん」
『まどみちお全集』 | 理論社・1994年 | ①・詩 |
| 5 | 金子みすゞ | 「すずめのかあさん」
『みすゞこれくしょん』 | 金の星社・2005年 | ③・詩 |
| 6 | 工藤直子 | 「あめあがり」
『のはらうた わっはっは』 | 童話屋・2005年 | ①・詩 |
| 7 | まど・みちお | 「てんぷらびりびり」
『まどみちお全集』 | 理論社・1994年 | ①・詩 |
| 8 | 鶴見正夫 | 「ぼくとカレンダー」 | 理論社・2002年 | ①・詩 |

9	工藤直子	「ほしのこもりうた」 『のはらうたⅡ』	童話屋・1985年	①・詩
10	吉田兼好 訳・弦川琢司	『徒然草』	学研・2008年 『超訳日本の古典6』	①・昔の随筆
11	清少納言	『枕草子』	講談社・2009年 『21世紀版 少年少女 古典文学館4』	①・平安の随筆
12	日高敏隆	「迷う」	教育出版・小国語『ひろ がる言葉』より	①・随筆
13	諸富祥彦	『悲しみを忘れないで』	WAVE出版・2011年	②・随筆
14	鎌田洋	『ディズニー・ありがとうの神様 が教えてくれたこと』	ソフトバンククリエイティブ 2011年	②・実話
15	小松田勝	『あなたに幸せの魔法をかける ディズニーランドの言葉』	かんき出版・2014年	②・実話
物語（低学年～中学年）				
16	いとうひろし	『だいじょうぶ だいじょうぶ』	講談社・2008年	②・物語
17	ロルト・ダール	『一年中わくわくしてた』	評論社・2007年	②・物語
18	宮西達也	『きみはほんとうにステキだね』	ポプラ社・2004年	③・物語
19	宮西達也	『おまえうまそうだな』	ポプラ社・2003年	②・物語
20・21	いわむらかずお	『14ひきのあさごはん』	童心社・1983年	③・物語
22	田島信元 (東多江子)	『南極物語～タロとジロ』	永岡書店・2012年『365 のみじかいお話』より (講談社・2011年 参照)	③・実話
23	松谷みよ子	『つるの恩返し』	偕成社・1966年 (主婦の友社・2014年 『頭のいい子を育てる 日本のおはなし』参照)	②・昔話
24	童話(イソップ)	『ウサギとカメ』	永岡書店・2012年『365 のみじかいお話』より	③・童話
25	西本鶏介	『ももたろう』	ポプラ社・1990年	①・昔話
26	角野栄子	『おばけのソッチ1年生のまま』	ポプラ社・1983年	①・物語
27	ルイジ・M・オルコット	『若草物語』	集英社・2012年	②・物語
28	宮沢賢治	『よだかの星』	岩崎書店・2005年	②・物語
29	宮沢賢治	『注文の多い料理店』	主婦の友社・2014年	②・物語
30	宮沢賢治	『オツベルと象』	講談社・1985年	③・物語
31	宮沢賢治	『カイロの団長』	世界文化社・2004年『宮 沢賢治童話集』より	①・物語
物語（中学年～高学年）				
32	アーネスト・T・シートン	『ビンゴ わたしの愛犬』	角川書店・2002年 (『シートン動物記』より)	②・物語
33	タニア・シュテプナー	『動物と話せる少女リリアーネ』	学研教育出版・2012年	①・物語
34	アーネスト・T・シートン	『オオカミ王ロボ カランポー の支配者』	角川書店・2002年 (『シートン動物記』より)	③・物語

35	星新一	『デラックスな金庫』	講談社・2005年 (『斎藤孝の名作選 3 年生』より)	③・物語
36	アーネスト・T・シートン	『スプリング・フィールドのキツネ』	角川書店・2002年 (『シートン動物記』より)	③・物語
37	島田洋七	『佐賀のがばいばちゃん』	徳間文庫・2004年	③・実話
38	安房直子	「きつねの窓」	教育出版・小国語『ひろ がる言葉』より	③・物語
39	秋本真	『怪盗レッド からくり館から の大脱出』	角川書店・2013年	②・物語
40	安房直子	『ひぐれのお客』	偕成社文庫・2011年 (童話集『遠い野ばら の村』より)	②・物語
41	芥川龍之介	『蜘蛛の糸』	ポプラ社・2005年	③・物語
42	金谷敏博	『5分後に意外な結末④黒い ユーモア』より「姉の心配」	学研教育出版・2014年	③・物語
43	砂川雨路	『僕らの空は群青色』	スターツ出版・2017年	③・物語
44	十和	『笑って、僕の大好きな人』	スターツ出版・2016年	①・ファンタジー
45	夏原雪	『最後の夏ここに君がいたこと』	エース出版・2016年	②・物語
46	遠藤まり	『超吉ガール』	角川文庫・2015年	③・物語
47	夏目漱石	『坊ちゃん』	角川つばさ文庫 ・2013年	③・物語
48	江戸川乱歩	『怪人二十面相』	ポプラ社・2005年	③・物語
49	小林良介	『5分後に意外な結末』より 「空席」	学研教育出版・2014年	⑤・物語
50	梨木れいあ	『晴れヶ丘高校 洗濯部!』	スターツ出版・2017年	②・物語
51	夏目漱石	『夢十夜』「第3夜」	あすなろ書房・2011年	③・物語
52	高野莓	『Orange【オレンジ】』	双葉社・2015年	①・物語
53	金谷敏博	『5分後に意外な結末③白い恐 怖』より「期末試験」	学研教育出版・2013年	⑤・物語
54	櫻いいよ	『君が落とした青空』	スターツ出版・2016年	②・物語
55	チーム151E	『天国への手紙』	学研教育出版・2013年	②・実話
56	金谷敏博	『5分後に意外な結末②青い鳥 ミステリー』より「プロの誇り」	学研教育出版・2013年	⑤・物語
57	沼野正子・編	『今昔物語』より「どうしてもダ イエットできない男」	草土文化社・2008年	③・昔話
58	りょくち真太	『戦国ベースボール』	集英社・2015年	①・物語
59	麻希一樹	『5分後に意外な結末』より 「鬼ごっこ」	学研教育出版・2013年	②・物語
60	櫻いいよ	『飛びたがりのバタフライ』	スターツ出版・2017年	⑤・物語
61	宮沢賢治・編	『子育てゆうれい』	主婦の友社・2014年 『頭のいい子を育てる 日本のおはなし』	②・昔話
62	夏目漱石	『坊ちゃん』	集英社・2017年	⑤・物語
63	水野ユウリ	『あの夏を生きた君へ』	スターツ出版・2016年	②・物語

翻作内容



1 次の3～5時で、交流を入れずに読み考える時間を確保したことで、多様な翻作方法を選択できたと考えられる。翻作の方法として提示した「④そのまま写して線を引く」に留まった子はいなかった。文を書き換えているうちに、書き足したくなる子どもが多かったようで、「②表現を換えて足す」翻作方法が一番多くなった。「③視点を变えて表現する」子どもたちは、「その人物の心情をよく考えることで、より理解が深まった。」と話していた。

資料8 子どもたちの変容（抽出児）

○C児

事前の様子…「本は大嫌い」と全く読まなかった。登校に波があり、学力も不振。学習中の発言はほとんど無かった。友人関係も、築きにくい状態であった。

「きつねの窓」での変容…視点をもって読み、読書会をすることが楽しかったのか、グループ内の発言がよく見られるようになった。全体の話し合いの場では、最後の一文から「これはいつも一緒にいる友だちができたことを表している。」と発言。資料編P3のA・EもC児の発言である。

ブックリストでの変容…「本を読んで初めて感動した」と本を持って話しにきた。それをリストに載せたいと何度も読み返し、時間をかけて作品を完成させていた。

その後…似たような本を2冊読み終え、その後は友だちに薦められた本を3冊読んでいた。読書記録には書いていないが、感想を伝えに来てくれた。活動の感想には「とても良いもの（作品）ができたと思います。やっていてとても楽しかったです。」と書いていた。

○D児

事前の様子…読字はできるが書字が苦手で、日記を書くこともままならなかった。また、集中を持続させることが難しく、何かを仕上げることに困難を抱えていた。

「きつねの窓」での変容…文章を読み、自分の役割の部分に線を引くことができた。記録はできなかったが、グループ内では自分の意見を言う場面も見られた。

ブックリストでの変容…興味を持った本を何冊も手に取り、詩と『徒然草』の2作品で翻作した。その後…PCで短編を書いてきた。あらすじは「ある日、何もかもに絶望した主人公が、帰り道にふと、周りの家から温かい会話が満ち溢れていることに気付く。自分の家の前で立ち止まると…同じように温かい家族の声が聞こえてきた。主人公は自分にも宝があると気付き、家の扉を開ける。」というものだった。

資料8-2 子どもたちの感想（自由記述）より

- ・リテラチャーサークルで知った観点が役立ち、本の内容と向き合うことができた（2名）。
- ・本の内容について新しい発見がたくさんあった。
- ・本の世界を変えてみて楽しかった。気付いたら本のとりこ。これからも沢山本を読みたい。
- ・自分の好きな本を選べたので、とても楽しくできた（8名）。
- ・リテラチャーサークルやブックリスト作りなど、1年間の国語の授業がとても楽しかった。
- ・はじめは難しいと思ったけど、やってみたらすらすら書けた。これから一人でも続けていきたい（5名）。
- ・一人で作るより、みんなの作品を合わせて作り上げたのが楽しかったし、達成感があつた（3名）。
- ・翻作では自分で考える自立性を磨けた。それ以外にも、みんなで項目や順番、題名をどうするか考えたことで協調性も磨けたと感じた。
- ・一冊一冊を、いつもよりもっと深く考え、読むことができた。
- ・何度も読み返すことで、よりその本が好きになった。（1年前の4倍本が好きになりました。）
- ・前よりもずっと読書が楽しくなった。
- ・みんなでブックリストの作品を読み合うことで、読書の幅が広がった。

（本の名前をリットルと只、迫り、より、作名を考へて、自分から考えて翻作をしよう）

（自由に思ったことや気付いたことをどうぞ！）

この授業を通して、深く読むことや、自分の考えを深くしていくように、がんばりました。みんなでそれぞれの立場や文で自分の心の表現をし、自分たちだけの1つのブックリストになりました。

（ブックリスト作りで改めて本の良さを知ったという）

その他（自由に思ったことや気付いたことをどうぞ！）

このブックリスト作りは楽しいのでこれから続けていきたいです。

（他のみんなと深く読み合いながらもっと良くていい）
てよかったです。

その他（自由に思ったことや気付いたことをどうぞ！）

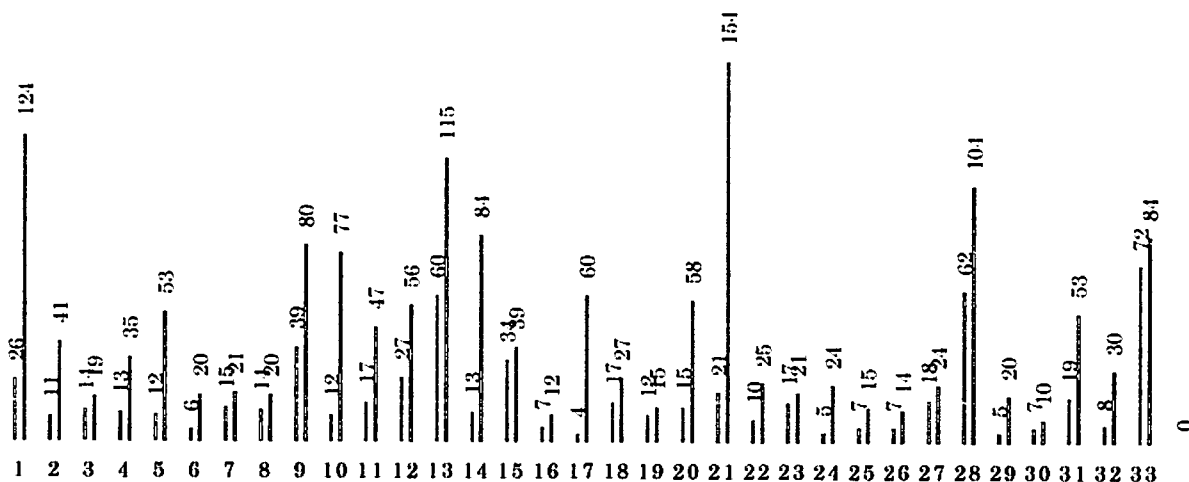
この授業を通して、深く読むことや、自分の考えを深くしていくように、がんばりました。みんなでそれぞれの立場や文で自分の心の表現をし、自分たちだけの1つのブックリストになりました。

こんな経験ができてほんとうに良かったです。
やらせていただき、ありがとうございました。

資料9 読書量の変化

読書冊数の変化

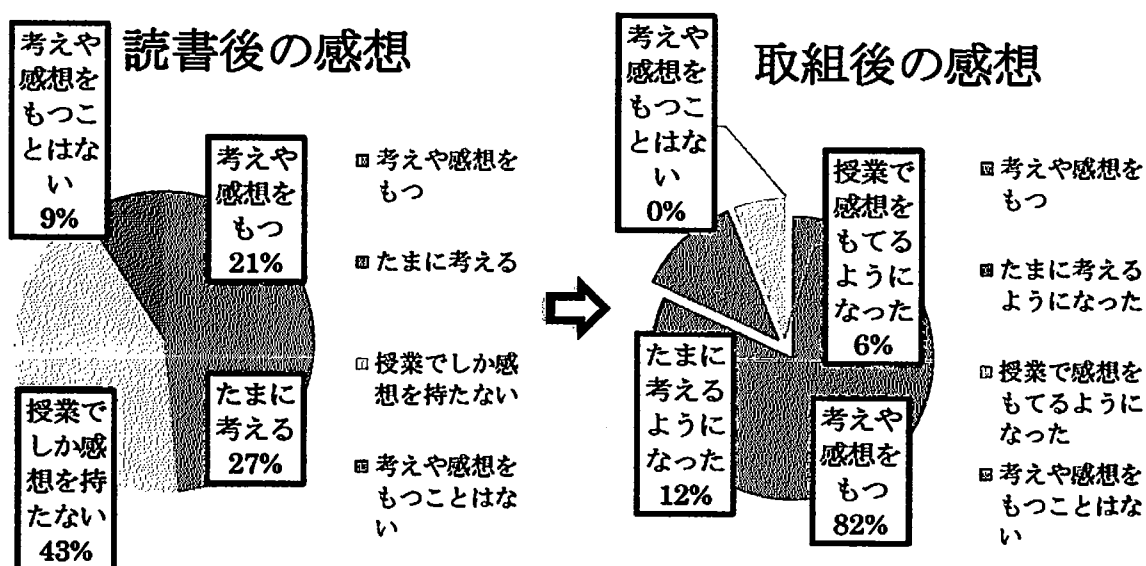
12月2日 3月10日



※下部の番号は児童番号、棒グラフ上の番号は読書冊数。

冊数を伸ばすことが目的ではなかったが、自然と伸びが見られた。冊数の伸びが少ない子どもの中には、長編や近代文学を読むことに挑戦している子もいた。子どもたちが本を読むことに必要感を感じたことで、読書の時間が増えたと考えられる。

資料10 取組後の「考えや感想をもつ」ことに対する意識の変化



※今回のとりくみを通して、「本の内容を深く考えながら読んだ」または「くり返し読んだ」児童は、いずれも 100%であった。

また、「本の内容を考えると、よく分かっておもしろい」と回答した児童も 100%にのぼり、読み味わう楽しさを感じることができたようだ。

事前調査と取組後の調査を比べると、普段から本を読んで考えや感想を持つ子が 21%から 82%に増え、感想を持てない子が 0%になった。この結果からも、読みの力が高まってきたと考えられる。

《主な参考文献》

- ・桂聖 編『論理が身につく「考える音読」の授業』東洋館 2011年
- ・尾崎 靖二『「言葉の力」を高める新しい国語教室入門―井上一郎理論に学ぶ―』明治図書
2006年
- ・高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春 編著『国語科重要用語辞典』明治図書 2015年
- ・宇佐美寛『論理的思考と授業の方法』明治図書 2003年
- ・野口芳宏『読解・鑑賞学力の形成技法』明治図書 2001年
- ・渡辺富美雄『国語科学習指導の改善と課題』国土社 1988年
- ・中教審答申「第2章 各教科・科目等の内容の見直し」H28年12月21日